旅立ち

要旨

人生を旅と観ずる作者は、旅に死んだ古人のことをも思い合わせ、旅への思い断ちがたく、まだ見ぬ土地への憧れも抑えがたい気持ちの中で、旅立ちの準備を調え、庵を人に譲って、杉風の別宅に移った。そして三月二十七日に江戸の春の景色に別れを告げて、千住まで舟に乗り、そこから奥州への長途の旅に出かけた。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め～P一〇〇・11〈掛け置く。〉	一度去って帰ることのない時の流れは、いわば旅人であり、人生もまた旅と言える。多くの古人が旅に生き旅に死んだ。自分も、一所不住の旅に生きてきたが、しばらくこの草庵に落ち着いていると、白河の関を越えて奥州へ旅に出たいという気持ちにかられた。庵を人に譲って、杉風の別宅に移った。
第二	P一〇一・1〈弥生も〉～終わり	三月二十七日、おぼろにかすむ江戸を旅立った。隅田川を舟で遡り、千住まで親しい人々は見送りに来た。行く春を惜しみつつ人々と別れる悲しみの涙にくれながらも、奥州への一歩を踏み出した。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

①月日（つきひ）　は　百代（はくたい）　の　過客（くわかく）　に　して、　行（ゆ）きかふ　年（とし）　も　また
係助・提示　格助・体修　断用　接助・単接　八四・体　係助・同類　副

旅人（たびびと）　なり。　②舟（ふね）　の　上（うへ）　に　生涯（しやうがい）　を　浮かべ、　馬（うま）　の　口（くち）
断終　格助・体修　格助・場所　格助・対象　バ下二・用　格助・体修

とらへ　て　老（お）い　を　迎（むか）ふる　者（もの）　は、　日々　旅（たび）　に　して、　旅（たび）
八下二・用　接助・単接　格助・対象　八下二・体　係助・提示　断用　接助・単接

を　栖（すみか）　と　す。　③古人（こじん）　も　多（おほ）く　旅（たび）　に　死せる　あり。
格助・対象　格助・資格　サ変・終　係助・同類　形ク・用　格助・場所　サ変・未　完・体　ラ変・終

④予（よ）　も、　いづれ　の　年（とし）　より　か、　片雲（へんうん）　の　風（かぜ）　に
代　係助・同類　代　格助・体修　格助・起点　係助・疑問　格助・主格　格助・受対

誘（さそ）はれ　て、　漂泊（へうはく）　の　思ひ（おもひ）　やま　ず、　海浜（かいひん）　に　さすらへ、
八四・未　受・用　接助・単接　格助・体修　マ四・未　打用　格助・場所　八下二・用

去年（こぞ）　の　秋、　江上（かうしやう）　の　破屋（はをく）　に　蜘蛛（くも）　の　古巣（ふるす）　を
格助・体修　格助・体修　格助・場所　格助・体修　格助・対象

払（はら）ひ　て、　やや　年（とし）　も　暮（く）れ、　春（はる）　立（た）てる　霞（かすみ）　の　空（そら）
八四・用　接助・単接　副　係助・同類　ラ下二・用　夕四・已　完・体　格助・体修

に　白河の関（しらかはのせき）　越（こ）え　ん　と、　そぞろ神（がみ）　の　物（もの）　に　つき
格助・場所　ヤ下二・未　意・終　格助・引用　格助・主格　格助・対象　カ四・用

て　心（こころ）　を　狂（くる）はせ、　道祖神（だうそじん）　の　招（まね）き　に　あひ　て
接助・単接　格助・対象　八四・未　使・用　格助・体修　格助・対象　八四・用　接助・理由

取（と）る　もの　手（て）　に　つか　ず、　股引（ももひき）　の　破（やぶ）れ　を　つづり、　笠（かさ）
ラ四・体　格助・対象　カ四・未　打用　格助・体修　格助・対象　ラ四・用

①月日は永遠の旅人（のようなもの）であって、来ては去り去っては来る年もまた旅人（のようなもの）である。②舟の上で一生を送ったり、馬のくつわを取って老年を迎えたりする者（船頭や馬子など）は、その日その日が旅であって、旅（そのもの）を自分の栖としている。③昔の（風雅を愛した）人（の中に）もたくさん旅で死んだ人がいる。④自分も、いつの年からか、ちぎれ雲が風に誘われて漂うように、旅に出たいという思いが抑えられず、（最近も須磨・明石などの）海辺を旅し、去年の秋、隅田川のほとりのあばら家に（帰り、）蜘蛛の古巣を払いのけて（落ち着き）、そのうち年も暮れ、春になって霞の立ちこめる空の下で白河の関を越えようと、そぞろ神が取りついて心を物狂おしくさせ、（また、）道祖神の招きにもあって落ち着かず、ももひきの破れを繕い、笠のひもを付け替えて、三里に灸を据える（など旅支度にかかる）とすぐに、松島の月のことが何よりも第一に気にか

の　緒を　付け替へ　て、　三里に　灸　据うる　より、　松島の
格助・体修　ハ下二・用　接助・単接　格助・場所　ワ下二・体　格助・即時　格助・体修

月　まづ　心に　かかり　て、　住める　方は　人に
副　格助・場所　ラ四・用　接助・単接　マ四・已　存・体　係助・区別　格助・対象

譲り、　杉風が　別墅に　移るに、
ラ四・用　格助・体修　格助・帰着　ラ四・体　格助・時間

⑤草の　戸も　住み替はる　代ぞ　雛の　家
格助・体修　係助・同類　ラ四・体　係助・強意　格助・体修

表八句を　庵の　柱に　掛け置く。
格助・対象　格助・体修　格助・帰着　カ四・終

⑥弥生も　末の七日、　あけぼの　の　空朧々と　して、　月は
係助・強意　格助・体修　形動タリ・用　接助・単接

有明にて　光をさまれる　ものから、　富士の峰　かすかに
断・用　接助・単接　ラ四・已　存・体　接助・逆確　形動ナリ・用

見え　て、　上野、谷中の　花の　梢、　また　いつ　かは
ヤ下二・用　接助・単接　格助・体修　格助・体修　副　代　係助・疑問（略）

⑦むつまじき　かぎりは　宵より　集ひ　て、　舟
形シク・体　係助・提示　格助・起点　ハ四・用　接助・単接

と　心細し。
格助・引用　形ク・終

に　乗り　て　送る。　⑧千住と　いふ　所にて　舟を
格助・対象　ラ四・用　接助・単接　ラ四・終　格助・引用　ハ四・体　格助・場所　格助・起点

上がれ　ば、　前途三千里の　思ひ　胸に　ふさがり　て、
ラ四・已　接助・順偶

幻の　ちまたに　離別の　涙を　そそぐ。
格助・体修　格助・場所　格助・体修　格助・対象　ガ四・終

かって、（これまで）住んでいた庵は人に譲り、（とりあえず）杉風の別宅に移るときに、

⑤草の戸も住み替はる代ぞ雛の家と詠み（この句を発句とする）表八句を草庵の柱に掛けて置いた。

⑥三月も（押し詰まった）二十七日、明け方の空がおぼろに霞み、月は有明の月で光がもう薄くなっているものの、（遠くには）富士の峰がかすかに見えて、（近くには）上野、谷中の桜の梢（が見えるが、それ）を、またいつ（見ることができる）かと心細い。⑦親しい人々は残らず前の晩から集まって、舟に（一緒に）乗って送ってくれる。⑧千住という所で舟を上がると、前途三千里の（長旅への）思いに胸がいっぱいになって、夢幻のごとき（この世の中で、会うも別れも不定であるが、それでも親しい人々と別れる分かれ道となった千住の）町で、惜別の涙を流すのだった。

⑨行く　春　や　鳥　啼き　魚　の　目　は　涙
カ四・体　間助・詠嘆　カ四・用　格助・体修　係助・区別

⑩これ　を　矢立　の　初め　と　し　て、　行く　道　なほ　後ろ影　の
代　格助・対象　格助・体修　格助・資格　サ変・用　接助・単接　カ四・体　副　格助・主格

進ま　ず。　⑪人々　は　途中　に　立ち並び　て、
マ四・未　打・終　係助・提示　格助・場所　バ四・用　接助・単接

見ゆる　まで　は　と　見送る　なる　べし。
ヤ下二・体　副助・範囲　係助・区別　格助・引用　ラ四・体　断・体　推・終

⑨行く春や鳥啼き魚の目は涙

⑩この句を旅日記の初めとして（出発したのだが）、行く道はなかなか進まない。⑪人々は途中に立ち並んで、（私の）後ろ姿の見える限りは（見送ろう）と見送っている様子である。

学習活動のポイント

■導入

学習活動のポイント

❶「おくのほそ道」について既習の知識や知っている芭蕉の句をあげる。

❷ 俳諧の歴史・作者・作品について学ぶ。知技(1)ア

❶「おくのほそ道」は中学校で学習しており、芭蕉の名句はさまざまな形で耳にしているだろうから、生徒にもなじみがあろう。「おくのほそ道」から幾つかの句をあげて、知っているか聞いて、興味を喚起したい。

❷「俳諧」とは、室町末期に、おかしみを中心とする「俳諧連歌」であったものが、近世に至り、松永貞徳（貞門派）・西山宗因（談林派）らが独自のジャンルとして定着させた、松尾芭蕉に至って、世俗的な軽みの中に風雅の精神を追求したものである。「古人」に倣い、自分も旅によって歌枕を訪ね、自己の俳諧という文芸を完成させようとしたことなど、「おくのほそ道」を読むうえで大事な事柄を説明する。

「おくのほそ道」は旅の事実を記録したものでなく、作者が旅の文芸として、事実を潤色させて完成したものであることも分かっている。生徒たちにも注意させたい。

【評価】 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

■展開

学習活動のポイント

❶「旅立ち」を音読する。思判表B(1)ア

❷ 教師の範読を聞きながら、独特のリズムがどのような表現から生じているか考える。本文中から対句表現を探す。知技(1)ウ　→「言葉と表現」1

❸ 重要古語の意味・用法を確認する。知技(2)ウ　→「言葉と表現」2

❹ 古典の引用に注意しながら現代語訳する。知技(1)エ・(2)アエ　思判表B(1)ア

❺ 季語がもたらす意味合いに気をつけながら、発句を解釈し、作者の心情を理解する。思判表B(1)イ

❶❷指名して、ゆっくり大きな声で音読させる。その際、文章のリズムがどのようなところから生じているか考えさせる。それが対句によることに気づかせ、二度目に範読を聞きながら、対

句に傍線を引かせる。

❶【評価】俳文の文体の特徴を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、授業中に指名して音読させることにより、確認する。

❷【評価】我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ペーパーテストにより、確認する。

・文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、ペーパーテストにより、確認する。

❸動詞の活用を確認し、助動詞とどう接続しているかなど、文法書や教科書巻末の活用表などを使用しながらまとめる。重要古語は辞書で確認させる。「かは」の用法なども調べさせたい。

【評価】古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

❹「蜘蛛の古巣」（一〇〇・5）、「股引の破れ」（同・7）などの軽みの表現を使いながら、旅に出る動機を説明していることに気づかせる。古典を下敷きにしている箇所は、少し丹念に解説する。特に冒頭では、李白の文章をどのように生かしているか考えさせる。

【評価】文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

・我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解しているか、授業中の質問により、確認する。

・時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、授業中の質問により、確認する。

❺発句については、季語がもたらす意味合いに気をつけて、本文との関わりを大事にしながら、句に込められた作者の心情をつかませる。惜別の心情は、二つの句にそれぞれどのような観点から表現されているか、意識させる。住んでいる家、めぐり行く春という季節と二つの視点を押さえる。

【評価】季語がもたらす意味合いをつかみ、発句に込められた作者の心情について、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、句の鑑賞文を一〇〇字〜二〇〇字程度の鑑賞文にまとめさせ、提出させることにより、確認する。

■まとめと発展

学習活動のポイント

❶作者の旅に対する考えと旅立ちに際しての心境を本文に即してまとめる。思判表B(1)エ 主態

→「学習のポイント」1・「言語活動」1

❶作者が旅に命をかけようとしていたことを、具体的に表す文中の表現を指摘させる。「住める方は人に譲り」（一〇〇・8）

「上野、谷中の花の梢、またいつかは」（一〇一・2）「前途三千里の思ひ」（同・4）などの表現から、作者の心情を考えさせる。また、作者の旅と人生に対する考え方についてどう思うか、何人かの生徒に発表させるのもよい。

【評価】 本文中のどのような表現に作者の気持ちが表れているかについて、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、教室で指摘させ、作者の旅に対する心情を五〇字程度の文章にまとめさせることにより、確認する。

・進んで人生と旅についての作者の考えを理解し、俳諧の修辞や古典を踏まえた表現など、作者の工夫を読み味わい、学習課題に沿って、作者の旅への心情を話し合おうとしているか、分析する。

指導上の注意点と発問例

● 一〇〇ページ

問 **「月日は百代の過客にして」（2行目）について、**

(1) この表現は、「人は国の柱なり」と同じ表現技法である。このような表現技法を何と言うか。

(2) 「過客」と同義に用いられている本文中の語を指摘せよ。

(3) この部分を分かりやすく述べると次のようになる。空欄を適切な語で補え。

月日は、（　①　）から（　②　）にかけて（　③　）に（　④　）を続ける（　⑤　）のようなものであって、

(4) この一句と対句になっている表現を本文中から抜き出せ。

答 (1) 比喩（暗喩・隠喩）　(2) 旅人　(3) ①過去　②未来　③永遠　④旅　⑤旅人　(4) 行きかふ年もまた旅人なり

問 **「行きかふ年もまた旅人なり」（2行目）の「年も」とは、何に対して「も」と表現しているのか。**

答 月日

問 **「行きかふ年」は「行き交ふ年」の意である。この意を踏まえて分かりやすく述べた次の文の空欄を適切な語で補いなさい。**

語句の研究

● 一〇〇ページ

2 月日は百代の過客にして　「月日」は、「年月、時間」の意であるが、「月と太陽」の意も込められていよう。「百代」は「長い年月、永遠」の意。李白の文を収める「古文真宝後集」の貞享五（一六八）年刊本や「日本永代蔵」などでは「ハクタイ」と振り仮名があるのでハクタイと読まれているが、パジェスの「日仏辞典」には、「ひやくだい」とあり、必ずしも断定できるわけではない。「過客」は「旅人」の意。

3 古人　西行は建久元（一一九〇）年河内弘川寺に、宗祇は文亀二（一五〇二）年箱根湯本に、李白は宝三年当塗（中国安徽省東部の県）に、杜甫は七七〇年洞庭湖畔に、それぞれ客死したと伝えられている。

4 漂泊の思ひやまず　月日や年など時間が旅をしているように考える芭蕉は、時間の経過によって形成される人生も旅そのものと考えた。そこで、生きている限り、己の人生でも旅を続けたいと思ったのである。定住に安んじる気持ちはなく、一つの旅が終われば、次の旅へと駆り立てられる。ここでも「更科紀行」の旅を終えて半年、旅への衝動はいかんともし難かった。「おくのほそ道」の旅の終点である大垣でも、直ちに伊勢に赴いている。

5 海浜にさすらへ　貞享四（一六八七）年十月下旬から翌五年四月までの間に、尾張・三河・大和・紀伊・摂津・播磨などを旅した折（「笈の小文」の旅）、鳴海・伊良古崎・和歌の浦・須磨・明石などの海浜を歩いたことを述べたものであろう。

5 去年の秋　貞享五（一六八八）年八月末を指す。芭蕉は八月に入って、越人を伴い名古屋を出発、八月十五日の更科の月を賞し、善光寺を経て、下旬に江戸に帰った。これが「更科紀行」の旅である。

5 江上の破屋　「江」は、ここでは「隅田川」。「上」は「ほとり」の意。「破屋」は「あばら家」。隅田川に流れ込む小名木川に近い、今の東京都江東区常盤一丁目三番十二号の地が、芭蕉庵跡と伝えられている。

6 春立てる霞の空に　「立てる」は、「春立てる（春立つ）」（春になる、新年になる）と、「立てる霞（霞立つ）」（立った霞）の掛詞。「春（新年）になって、霞の立ちこめる空」の意。この句の掛かりについては三説ある。

来ては（　①　）、去っては（　②　）年もまた（　③　）と同様に（　④　）のようなものである。
①去り　②来る　③月日　④旅人

問 **答** (1)**「舟の上に生涯を浮かべ」（2行目）、(2)「馬の口とらへて老いを迎ふる者」（3行目）とは、それぞれどのような人か。**
(1)船頭として一生を過ごす人。(2)馬子として馬に旅客や荷物を積んで運びながら老年を迎える人。

問 **答** **「古人も多く旅に死せるあり。」（3行目）という表現に込められた芭蕉の気持ちはどのようなものか。**
人生を旅と考える自分にとって、尊敬する古人同様、旅で死ねれば本望という気持ち。

問 **答** **「誘はれて」（4行目）とあるが、何が誘われたのか。**
片雲。芭蕉の旅心。

補 **答** 文面から言うと片雲であるが、①片雲が風に誘われるように、②片雲が風に誘われるのを見ては（旅心を誘われて…）と二通りに解釈でき、いずれにしても誘われたのは芭蕉の旅心もである。

問 **言外にもう一つ「誘はれ」たものがあるが、それは何か。**
答 (2)作者（芭蕉）の旅心。

問 **「江上の破屋」（5行目）と同じ場所を示し**

①すぐ下の「白河の関越えんと」に掛かるとする説。この場合、「に」を場所を表す格助詞とし、「春になって霞の立ちこめる空の下で白河の関を越えようと」と採る。
②二句おいて、「心を狂はせ」に掛かるとする説。この場合、「に」を原因理由を表す係助詞とし、「春になって霞が立った空を見るにつけて、白河の関を越えたいものだと心を狂わせ」の意となる。③「越えんと」の後に「こころざし」または「思ひ立ち」が省略されており、それに掛かるとする説。この場合、格助詞「に」は場所、原因理由の両方が考えられる。書簡などによると、初めの予定は節句過ぎに出発して三月中に白河を越え、松島に至るはずだったが、余寒が厳しいという白河からの知らせにより、出発を遅らせたとされており、また、この部分が、能因法師の「都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関」（「後拾遺和歌集」羈旅）という歌を踏まえているとも考えられていることから、ここでは①説に従った。

6 白河の関　昔、蝦夷の警固のため設けられた関所で、常陸の勿来・出羽の念珠と共に奥羽三関の一つとして数えられ、歌枕としても有名。前述の能因法師の歌の他、「たよりあらばいかで都へ告げやらむけふ白河の関は越えぬと」（「拾遺和歌集」別・平兼盛）などの歌がある。

6 そぞろ神の　「そぞろ」を副詞に採り、①「狂はせ」に掛かるとする説、②「つきて」に掛かるとする説がある。副詞説は、「そぞろ神」の確かな用例が芭蕉以前に見られない、「そぞろ」という主観的な語が神という客観的なものに熟合しないという点で出たもの。文章構造からいうと「そぞろ神の」は下の「道祖神の」と対句的表現をなしており、文章の調子からも「そぞろ、神の」と二語に切らないほうがよい。名詞説には、①何となく人の心を落ち着かなくさせる神、心を誘惑する神、②歩行神、あてもなくさまよい出る歩き神、の意の両説がある。ここは名詞説の①に解しておく。

6 物につきて　そぞろ神が「自分に取りついて（何を見ても早く旅に出て行きたい心持ちになる）」。「物」は自分、あるいは身の周りのものを漠然と指す語。「つく」は、「神などが取りつく、乗りうつる」の意。

7 道祖神の招きにあひて　直前の「そぞろ神の物につきて」と対をなす表現。道祖神は

ているのは本文中のどの言葉か、適切なものを次の中から全て選べ。

(ア)住める方　(イ)杉風が別墅　(ウ)草の戸　(エ)雛の家　(オ)庵

問 答 (ア)・(ウ)・(エ)・(オ)

問 **「蜘蛛の古巣を払ひて」（5行目）とは、どのような様子を表現したものか。**

答 長期間留守にしていて、草庵の中が荒れている状態をユーモラスに表している。

補 貞享四（一六八七）年十月に「笈の小文」の旅に出、翌年八月に「更科紀行」の旅に出、草庵を留守にしていた。そして、半年経ってまた旅への思いが湧いてきている。

問 **「蜘蛛の古巣を払ひて」（5行目）とあるが、どうすることを言っているのか。**

答 家の中を掃除して住むこと。

問 **「春立てる霞の空に」（6行目）は、どの語句に続くか。芭蕉が最初三月中に東北に着く予定であったことを踏まえて答えよ。**

答 越えんと

補 芭蕉が実際に白河に着いたのは四月二十日である。「語句の研究」参照。

問 **「立てる」の掛詞的用法について説明せよ。**

答 「春になる」という意の「春立てる」と、「立ち込める霞」という意の「立てる霞」とを掛けている。

問 **「白河の関」（6行目）は能因の歌をはじめとして、古来、歌によく詠まれている。このような地を何と言うか。**

答 歌枕

問 **「白河の関」（6行目）を、目的地の一つとしてあげた理由は何か。**

答 芭蕉の旅は伝統的古典的世界への志向に根ざしており、名所旧跡はその縁（よすが）となるから。

補 歌枕として有名だからという程度の答えしか生徒からは出ないであろうが、能因の歌（語句の研究「春立てる霞の空に」の項参照）などをあげて、芭蕉の旅は、名所旧跡を訪れることが目的の一つであり、古人が作った文化を慕い、伝統的、古典的世界への志向に根ざしたものであること、そしてそれを自らの俳諧に生かそうと考えていたことなどを説明するとよい。

問 **「心を狂はせ」（6行目）とあるが、何が、芭蕉をどのような状態にしたのか。**

答 そぞろ神が取りついて、芭蕉の心を旅に駆り立てた。

補 「予も、いづれの年よりか…漂泊の思ひやまず」などと考え合わせ、旅に駆り立てられる芭蕉の心持ちを十分考えたい。

問 **「草の戸も住み替はる代ぞ雛の家」（10行目）の句意に合うものを次の中から選べ。**

(ア)私のような世捨て人の家も変わってゆくのだなあ。

道の安全を守る神で、道の分岐点などにまつられた。

7 股引　足を通してはき、腰から下を覆う男性用の下着。

8 三里に灸据うるより　「三里」は、膝頭の下で、外側のややくぼんだ所。ここに灸を据えると、健脚になるという。「より」は、「…するとすぐに」の意。

8 松島の月　「松島」は宮城県の松島湾一帯の景勝地。元禄二（一六九）年二月の猿雖（えんすい）宛と思われる芭蕉の書簡に「弥生に至り、待佗候塩竈の桜、松島の朧月、あさかの沼のかつみふくころより北の国にめぐり」とある。この旅の重要な目的地の一つであった。

9 杉風　杉山元雅。通称は鯉屋市兵衛。杉風は俳号。江戸日本橋小田原町の魚問屋で幕府の魚御用を務めていた商人。芭蕉の門人。いわゆる「芭蕉庵」を提供した人物であり、芭蕉に対してさまざまな経済的援助を行った。禅や茶に通じ、画を狩野昌運に学んだ。

9 別墅　別荘。深川六間堀にあった採茶庵をさす。

9 移るに　①移るときにとする説（「に」は時間の格助詞）と、②移ったところ、移ったがとする説（「に」は接続助詞）がある。

(イ)粗末だった家が立派に建て直されたなあ。
(ウ)この草庵には雛人形は似合わないなあ。
(エ)三月の節句だけあって、どこの家もきれいだなあ。

答 (ア)

● 一〇一ページ

問 「弥生も末の七日」（1行目）とあるが、「弥生の末の七日」とどう違うか。

答 一か月を上・中・末に三分したもので、「弥生の末の七日」とすれば、三月二十七日以上の何のニュアンスも含まないが、「弥生も末の七日」とすると、三月も押し詰まったという意が付加されるのである。

補 「弥生も末」と「末の七日」というように、「末」を掛詞的に使っているのである。

問 「光をさまれるものから」（1行目）は、(1)意味上、どの語句に続くか一文節で答えよ。(2)下文にどのように接続するか。

答 (1)見えて　(2)「ものから」は接続助詞で、①逆接（光は薄くなっているものの）、②順接（光は薄くなっているので）、③軽い中止法（光は薄くなっており）の三説がある。ここは①。

補 「おくのほそ道」には、もう一つ「ものから」の使用例があり（末の松山・塩竈の浦）、そこでは②順接の用法である。しかし、典拠となっている「源氏物語」の場合は、逆接で解釈すべきなので、それを踏まえたこの部分も①のように読みたいところである。

問 「またいつかは」（2行目）の後に補うべき語句を示せ。

答 見ん（見ることを得ん）

問 「心細し」（2行目）とあるが、誰が、何を心細く思っているのか。

答 芭蕉が、上野や谷中の桜を今度はいつ見ることができるだろうかと、江戸を離れ、長旅に出ることを心細く思っている。

問 「幻」（4行目）という表現に込められている芭蕉の思いは次のどれか、適切なものを次の中から選べ。

答 (ウ)

問 「ちまた」（4行目）の指し示す場所は、具体的にはどこか。

答 千住

問 「行く春や」（5行目）の句について、季語

この解釈の違いで、次の相違が生ずる。
①後で住む人が娘を持っている人であることを知っていて、雛を飾る様子を想像し、移るに際してこの句を作り、表八句を、芭蕉庵の柱に掛けた。
②移った後、芭蕉庵の辺りを訪れて、雛の飾られているのを見て「草の戸」の句を作り、表八句を、採茶庵の柱に掛けた。

ここでは、①説に従った。

10 草の戸も住み替はる代ぞ雛の家　季語は「雛」で季節は春（陰暦三月三日）。「独りわびしく住んでいた草庵も住み替わるときがきた。世捨て人の自分と違って今度は妻も子もある人が住むことになるので、雛祭りには、世間並みに雛人形が飾られた家となることだろう」の意。この句の中心は「住み替はる代ぞ」という芭蕉の心境であり、「草の戸」と「雛の家」という対照的なものによってそれはさらに深められている。常に移り変わる世の中を表現した句でもあり、冒頭文とも響き合う。芭蕉庵に住み替わった人が俗人だったことについては、真蹟短冊の前書きに「むすめ持たる人に草庵をゆづりて」とあることや、「世中百韻（よのなかひゃくいん）」所収のこの句の前書きに、「はるけき旅の

と季節を示せ。

問 **「行く春」の表現には、二つの思いが重ねられている。箇条書きで説明せよ。**

答 季語＝行く春　季節＝春

①過ぎ行く春を惜しむ思い。②住み慣れた江戸を出て、親しい人々とも別れて旅立つ、晩春の離別の思い。

問 **「鳥」や「魚」（5行目）が、鳴いたり涙したりする直接の理由は何か、簡潔に説明せよ。**

答 過ぎ行く春を惜しむため。

問 **「行く道なほ進まず。」（6行目）とあるが、なぜか。**

答 念願の旅立ちではあったが、親しい人々との別れは悲しく、後ろ髪を引かれる思いだったから。

補 旅に憧れる気持ちは強いが死をも覚悟しての大旅行なので親しい人々と二度と会えないことを思うと後ろ髪が引かれるのである。

問 **「後ろ影の見ゆるまでは」（6行目）の後に補うべき語句を答えよ。**

答 見送らん

問 **芭蕉は、旅に出ようとする動機をどのように述べているか、まとめよ。**

答 草庵に落ち着いてみると、居ても立ってもいられなくなるような旅への思いに駆られ、白河の関を越えて遠く奥羽の地を訪ね、名

空思ひやるにも…日比住ける庵を相知れる人に譲りて出でぬ。この人なむ妻を具し娘孫など持てる人なりければ」とあることでも分かる。

11表八句　五十韻（五十句一続きの連句）、または百韻（百句一続きの連句）を書く場合、一枚の懐紙を細長く二つに折って、五十韻は二枚、百韻は四枚を使用、それぞれ四面または八面に書きつけるが、第一枚を初折（しょおり）といい、初折の表に書く八句を表八句という。なお、五十韻は、二・三・四面に十四句ずつ、百韻は、二・三…六・七面にそれぞれ十四句ずつ、第八面に八句書く。歌仙（三十六句一続きの連句）は、六句、十二句、十二句、六句と四面に書く。

11柱に掛け置く　句を書いた懐紙は、水引きで綴じて、柱に掛けるのが普通である。

●一〇二ページ

1月は有明にて　陰暦十六夜以降、月が明け方の空に白く残っていること。また、その月。

2上野、谷中の花　「上野、谷中」は、共に現在の東京都台東区内の地で、桜の名所。元禄二（一六八九）年は一月に閏月があり、三月二十七日は陽暦の五月十六日になるので、桜の花が咲いているはずもない。ここは実景ではなく、観念の世界の桜花のことで、上野・谷中辺りの森を眺めて、見慣れたあの桜花を再び見ることがあるだろうかと心中に思ったのである。

3千住　現在の東京都足立区内の地。奥州街道の最初の宿駅。江戸四宿の一つ（他の三つの宿駅は板橋・内藤新宿・品川）。

3舟を上がれば　深川から千住まで、舟で隅田川を遡上した。

4前途三千里の思ひ　「三千里」は「三千里外遠行人」（「白氏文集」）などのように、漢詩で使われる語で、中国から胡地へ赴く遠い距離をいう。日本の古典でも「東関紀行（とうかんきこう）」の「李陵が胡に入りし三千里の道のおもひ、身にしらるる心地す」などの例があり、辺境遠隔の地への旅の思いを述べる慣用語となっていた。

4幻のちまた　「幻」は、「この世は無常で、夢幻のごとくはかないもの」の意。「ちまた」は、「道の分かれる所」の意と、「街路、町通り」の意とを兼ねる。ここは、「夢幻のごときこの世の中で、会うも別れるも不定であるが、それでも親しい人々との別れは悲しく、いよいよ別れる分かれ道となっ

勝松島の月なども賞でたいものという気持ちで旅に出た。

問 **「草の戸も」（10行目）の句で、「雛の家」から連想される新しい住人のイメージを、芭蕉の生き方と比較して答えよ。**

答 芭蕉が世捨て人として孤独に生きているのに対して、新しい住人は妻も娘もいて、雛祭りには世間並みに雛人形を飾るといった平和な生き方が想像される。

た千住の町で涙を流すことだ」の意。

5行く春や鳥啼き魚の目は涙　季語は「行く春」で季節は春。切れ字は「や」。「過ぎ行く春を惜しんで空行く鳥は悲しげに鳴き、水に遊ぶ魚も目に涙を浮かべているようである。その季節に私もまた、親しい人々との別れを惜しみつつ旅立って行くのである」の意。古来、和歌の世界で詠まれた、過ぎ行く春を惜しむ惜春の情を前面に出し、その背後に親しい人々との別れを惜しむ惜別の情がほの見える句であり、「行く春」と「鳥啼き魚の目は涙」の取り合わせは新鮮で美しい。陶淵明の「帰ニ田園居一」の「羈鳥恋ニ旧林一、池魚思ニ故淵一」や、杜甫の「春望」の「感レ時花濺レ涙、恨レ別鳥驚レ心」（一五二）などの漢詩が影響を与えているという指摘がある。なお、旅の終わりである大垣に「蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ」の句が結びの句として置かれており、「行く春」と「行く秋」とが照応している。

6矢立の初めとして　矢立（携帯用の筆と硯を入れるもの）を使う最初の機会として。旅日記の書き出しとして。

旅立ちの前段で、芭蕉は旅に対する考えを、つまり人生観を語り、抑えきれぬ旅への憧れと旅先への期待を吐露することで、旅立つ前の心境を述べている。こうした内容を「月日は百代の過客にして…」と中国の李白の文を下敷きにした、文学的修辞に勝った文章で書き出しており、歌人や連歌師の紀行を意識しながら、俳文による新しい紀行を執筆するという意気込みを感じざるを得ない。

この旅について、「今年の旅は、やつしやつして薦かぶるべき心掛けにて御座候ふ。」（元禄二〔一六八九〕年二月頃、猿雖宛書簡）と芭蕉自ら述べているように、物乞いをしても旅を続けるという決意のほどがよく出ているが、無常の世の中、死をも覚悟していたのである。それは後段にある、「上野、谷中の花の梢、またいつ見むと、かねて心細き旅立ちなり。」という言葉からも知ることができる。

鑑賞

「おくのほそ道」の旅は、「笈の小文」の旅、「更科紀行」の旅に続くものであるが、芭蕉の内面においては、「更科紀行」の旅により近いものがあると言われる。「野ざらし紀行」「笈の小文」の旅は、東海から近畿の一門の人々の間を回って連句を巻き、また、郷里上野に滞在し、時に古跡や歌枕を訪れるという旅であった。それに対して、「更科紀行」の旅は、門人・知人も余りいない山間を歩いて姨捨の月を見るという、自然と歴史への回帰の旅であった。奥羽地方への行脚を思い立ったのも、奥州の歌枕を実地踏査し、歌人や連歌師の詩魂を感得せんと志したものと見られる。

つかはと心細し」や「幻のちまた」という語句によって明らかであろう。そうした無常観は、「草の戸も」の句にも示されていて、草庵までも有為転変の相の象徴となっているのである。

「行く春や」の句は、末尾の大垣に置かれた「蛤（はまぐり）のふたみにわかれ行く秋ぞ」との照応が指摘されている。「行く春」と「行く秋」との呼応ばかりでなく、後段では舟から上がって旅へ出るのと、大垣では舟に乗って旅立つという設定も首尾照応している。それは連句において発句と挙句とが微妙に照応する点に似ていて、構成の妙をうかがわせる。「行く春」「行く秋」は晩春でも晩秋でもなく、春から夏へ、秋から冬へと移り変わっていく時の流れを如実に示す語句である。「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。」という冒頭にふさわしい季語だと言えよう。